



そつたくどうじ 啐啄同時

校長 長谷川 豊

夏の終わりに禅寺を訪ねました。住職からこんな話を聞きました。

「啐啄同時」という禅の言葉があります。

「啐」は、卵の中の雛が内側からコツコツとつつく音のことです。「啄」は、そんな卵の変化に気付いた親鳥が外側からコツコツと殻をつつく音のことです。

親鳥が雛が十分に成長する前に外側から殻を破ってしまったら、準備が整う前に下界に出てしまった雛は無事に成長することができません。また、親鳥がいつまでたっても殻をつつくことをしなければ、自分の力だけでは殻を破ることができない雛は殻の中で力尽きてしまいます。

親鳥のサポートが早すぎても遅すぎてもだめで、「啐」と「啄」が同時に行われて、雛が元気に産まれます。これを「啐啄同時」と言います。

殻を破る雛とそれを導く親鳥の話ですが、これは私たち人間の親と子の関係、教師と子どもの関係にも相通じるものがあると思いました。その子どものペースに合わせて関わることとタイミングの大切さを改めて噛みしめました。

「国語（算数）の授業はよく分かりますか。」というアンケートに、94.2%の子どもが「そう思う」「まあそう思う」と答えてくれました。嬉しいことなのですが、その中には、担任の目から見て、よく分かってないのではと思われる子どももいます。アンケートに答えているときの子どもの気持ちを考えると、何とも言えない気持ちになります。子どもの自己評価に甘えてはいけないのだと思います。

私たちの仕事は、教えるだけではありません。子どもをやる気にさせることも大切な仕事です。「馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない」というイギリスの諺があります。JRA通算4,000勝を成し遂げた競馬界のスーパースター武豊騎手が、他の騎手と一線を画する決定的な違いは、性格も癖も走り方も全く違う馬一頭一頭と向き合い、馬を尊重するところにあると言われています。

子どもは大人（親や教師）の一言で、自信を失ったり、傷ついたりしてしまう場合もあれば、逆に一言で大きな勇気を得る場合もあります。大切なのは、子どもへの共感と尊重です。子ども目線に立って、共に考え、共に悩み、共に喜ぶ大人でありたいと思います。

小針小学校の子どもたちが自らの夢や目標に向かって着実に前進できるよう、子どもがあと一步で殻を破ることができそうなタイミングを見逃さず、子どもからの音なき「啐」を感じ取り、どこをつつけばよいのかそっと「啄」をしてあげる。そんなプロ教師を目指して、小針小学校の教職員は学び続けていきます。